研究報告

# 持続可能社会と里山モデル
## ―琵琶湖水域圏の保全再生に向けて―

龍谷大学名誉教授・里山学研究センター研究フェロー
丸山　徳次

「持続可能性sustainability」という言葉は、元々は18世紀初期のドイツ林学に由来し、日本では既に明治時代から「保続性」という訳語（Nachhaltigkeitの訳語）によって林業政策において用いられてきた。この言葉はしかし、20世紀の終わり近くに一気に環境問題の解決方向を指示する言葉になった。すなわち、20世紀に様々な環境破壊・環境汚染を経験してきた私たちが、立場を超えて賛同しうる環境問題解決の積極的な方途は、人間のあるべき社会としての公正な持続可能社会の形成にある、と考えたのである。日本の場合、水俣病事件に象徴されるような悲惨な公害を経験してきたが、「公害から環境問題へ」の転換は、二度と同じような犠牲を生み出さないために、「事後救済から事前予防へ」とあらゆる発想を転換すべきことを意味したはずである。そして、危害を予め防ぐということは、より積極的には、同時代および将来にわたって無意味な犠牲を生み出さないで、命をつないでいくことのできる持続可能社会を構築することを意味する。そのことは、気候変動の危機に直面する今も同じである。それ故、持続可能社会の基盤は世代内および世代間の正義（公正・公平・平等）という倫理的理念である。

2007年に日本国政府が発表した「21世紀環境立国戦略」は、低炭素社会・循環型社会・自然共生社会の統合によって持続可能社会を推進することを謳っている。私たちの里山学研究センターは、里山モデルを構築することによって、自然共生的な持続可能社会の実現に向かうことを追求してきた。私の提案する「里山モデル」は、環境問題を解決し、持続可能社会を追求する場面で、「里山」の視角から何を考察し、討議し、追求すればよいのか、すべきなのか、その方向を表している。つまり、「里山モデル」とは、理想的な存在形態を表示する〈理念としての里山〉であり、〈理念としての里山〉の諸性格に向かう視点であり、そこに注視することによってそれら諸性格を実現する方向が「課題」として突きつけられてくる、そういう焦点である。そうした視点・焦点は、極めて抽象的なコンセプトだけを列記すれば、以下の通りである。①利用と保全の調和性（利用による保全）、②多様性、③日常性、④関係性（つながり）、⑤自然適応性・順応性（合自然性）、⑥再生可能性・循環性、⑦風土性・場所性、⑧コモンズ性（共同性・協働性）。

そもそも里山学研究センターが探究してきた「里山」とは、単に歴史的伝統的な「里山」概念ではなくて、1980年代以後の生態学的な研究を土台にした現代用語としての「里山」である。すなわち、「里山」は単に「奥山」と対比された「里の山」、つまり「農用林」「薪炭林」「里山林」（雑木林）と呼ばれるものに山野・原野・草地を含むものを意味する〔里山Ⅰ〕だけではなくて、環境省の言う「里地里山」つまり「里と山」のセット〔里山Ⅱ〕でもあり、生態学で言う「人為攪乱による二次的自然」である。この場合の「人為攪乱」とは、伝統的には農林漁業であり、それゆれSATOYAMAイニシアティブは「社会生態学的生産ランドスケープ」と

規定している。それ故、里海・里湖・里川などをも含む最広義の「里山」〔里山Ⅲ〕を、私自身は「人の手が入った自然」と定義し、「文化としての自然」と呼んできたし、「里山的自然」と言ってきた。環境省は日本の国土の約40%が「里地里山」だと言っているが、日本の自然の全体は、それよりも広く里山的自然の状態を保持してきた。それが急激に劣化したのは、都市化と共に農林漁業の質的変化と縮小つまり人の手が入らなくなったことによる。

いま琵琶湖に注目すると、世界で唯一大都市近傍にある「古代湖」である琵琶湖は、自然と人工とが結びあい、せめぎあう〈半自然〉である。かつては底泥や藻やシジミ貝殻などが農業肥料として用いられたり、周辺植物を利用する多様な漁業技法が駆使されるなど、琵琶湖は里山林・河川・水田と結びあって里山的な生態系をなしていた。滋賀県では2003年、「環境こだわり農業推進条例」が制定され、「環境への負荷を低減し、農業の有する自然循環機能を高める新たな取組」が推進されているが、環境こだわり農業の一環として位置づけられた「魚のゆりかご水田」事業は、「里山モデル」から見て最も典型的なモデル・ケースの一つである。かつて琵琶湖周辺の水田は、低湿で琵琶湖の水位変動の影響を受けやすかったために、フナ・コイ・ナマズ等の琵琶湖に生息する魚類の産卵繁殖にとって重要な場所だった。琵琶湖総合開発や圃場整備事業によって分断されてしまった琵琶湖と水田とを再びつなぐために、水田の排水路に階段式の堰を設けるなどして、魚が遡上する魚道を再生するのがこの事業である。農業従事者のなかには、水田の生きものたちの賑わいが、幼少期の魚つかみの文化の記憶を想起させ、現在の子どもたちに喜びを与えることに満足を覚える人が多い。琵琶湖と水田とのつながりの再生が、人びとをつなぎ、世代をつないでいるのである。魚道を確保するための堰を、地元山林の間伐材を使って構築する試みが行われたり、「魚のゆりかご水田米」が、物語性を持った一つのブランド商品となって売られてもいる。琵琶湖沿岸域に生きものたちが行き交うエコトーン（移行帯）を再構築する「魚のゆりかご水田」事業は、「里山的自然」再生の試みの一つとしてその発展に注視していきたい。